

山田長政のイメージと日タイ関係

土屋了子†

The image of Yamada Nagamasa and the relationship between Japan and Thailand

Satoko Tsuchiya

Yamada Nagamasa is famous historical person of 17th century who went to Siam and got high rank's official of Siamese court. From old times until today, so many books have been written about him and sometimes Yamada's image were "made" in order that it can play a role politically and so on.

For the first time, between 1888 and 1900, Yamada's image was "made" as if he got bigger political power in Siamese court than real, for example, he governed Siam instead of Siamese king. This image making was influenced by Nationalism, Asianism and Southern-advance in Japan of that time. In order to solve the problem of western colonial threat to the nation's independence, Japan struggled to find ways: Asianism, Southern-advance... and so on. The important Yamada's image's role during this time is the role as the model(good example) who practiced Asianism and Southern-advance in the past. In order that Yamada's image could play this role, Yamada's image was "made" as above-mentioned.

Second time which Yamada's image was "made" is 1940s. On 8th December 1941, Japan began to attack Pearl Harbor. During the Pacific War, Japanese government made up and used the thought "Greater East Asia co-prosper sphere" in order to justify the war and in order to rise fighting spirit of Japanese people. Japanese government also made new Yamada's image as the hero who went to Siam in order to make "Greater East Asia co-prosper sphere" in Siam for Japan. Even though the "Greater East Asia co-prosper sphere" were decorated by many ideals, for example, to release Asian people from western colonial, but its real purpose is to invade Asian countries. So, even though the image of Yamada of this time was plus one as a hero for Japanese people, but it still hides invasion's thought inside.

After the World War II, in Japan the image of Yamada was never used politically, but the image still reflected the Japan's view about Thailand. It is clear from Yamada's image during this time that Japan's interest into Thailand changed from political one to commercial one.

On the contrary, in Thailand Yamada's image was "made" in 1970s in order to fulfill political purpose. Japan's economical advance to Thailand was obvious at that time and big economical deficit from the trade with Japan made Thailand so unsatisfied that Thailand used Yamada's image who have more political and economical power than real in order to criticize Japan's economical act in Thailand.

The difference of Yamada's images between two countries sometimes still have invisible but big influence on the relationship between Japan and Thailand, like in the case of Yamada's memorial which was made in Nakhonsiithamaraat province in August, 2001.

† 早稲田大学アジア太平洋研究センター特別研究員, タイ国ウボン大学講師

はじめに

2001年8月に、山田長政の故地、タイ国ナコーンシータマラート市に山田長政の石碑が建造された。この建造は、タイの反日感情を引き起こす引き金になることが懸念され、日本側、タイ側双方に少なからず波紋をおこした。これは、山田長政のイメージが、現在においても日タイ関係に影響を与える可能性を有することを示した事件であった。

山田長政は、戦前の日本人なら、教科書や参考書の中でその名を目にしたことがある著名な人物である。教科書のみならず、17世紀末に山田長政の事蹟に関する書物が現れて以来、今日に至るまで書物、雑誌記事、脚本など山田長政をテーマとしたものは多数に上る。タイにおいては、山田長政は1930年代の日本との交流を通じて知られるようになったものであるが、それ以降、山田長政は日タイ関係において常に引照される人物となってきた。

本稿は、日本およびタイにおける山田長政に関する記述の総体を、それが現れた当初より今日に至るまで、極力系統的に調査収集することによって、明らかにしようと努めたものである。さらに、これらの資料から読みとることができる山田長政像の特徴を、日本に関しては5つの時期に区分して分析したい。その際、どのような時代状況、史的背景のもとでそのような山田長政像が作られたのか、また、作られた山田長政像と、日本人のタイ観・対タイ態度、あるいはタイ人の日本観・対日態度との間には、どのような相互関係があるのかを、できるだけ明らかにすることを念頭に置いている。

本稿のように山田長政に関する記述の総体を対象とした、包括的の先行研究は存在しない。本課題に近い先行研究としては、キャロル・パリッシュと石井米雄のそれが存在する¹が、パリッシュの研究も石井のそれも1935年から戦中にかけての山田長政神話を対象としたものに止まっている。パリッシュは「神話」という語を、「事実と虚構とに関係なく、政治的展開に影響を与えるような信念」と定義した上で、山田長政にまつわる神話が近代における日本とタイとの政治的関係に微妙な影響を与えていると分析した。一方、石井は、山田長政はタイに雄飛した日本の英雄であり、「崇高なる日本建国精神」と「天地の公道を教示した」人物であると、当時賞賛されたが、それは実像を歪めた虚像であった、と論じた。

筆者は上述の先行研究の見解を基本的に支持する。ただし、これらの先行研究は1935年から1945年までの10年間だけを対象として、長政神話を論じているのに対し、本稿では江戸時代から現在に至るまで、長期に亘る山田長政像の変遷を追うことによって、1935年から戦中にかけての時期のみならず、明治中期(1888年～1900年)においても、長政神話が存在したことを明らかにしている。

本稿で用いる主な資料は、日本国内では国立国会図書館の他に、次のような専門図書館で収集した。すなわち、古い教科書については、目黒の国立教育研究所の教育資料・情報センターの図書館。児童書については都立日比谷図書館の児童資料室。レコードについては、日本近代音楽館。文学については日本近代文学館。これらの資料調査によって、日本国内の山田長政についての文献は、収集可能なものはほぼすべて収集できたものと考えている。

タイ側資料の収集においては、まず、王朝年代記(プラチュム・ボンサワダーン)に目を通した。次いで、チュラーロンコーン大学、タマサート大学の中央図書館において、資料調査を実施した。英文資料は、シャム協会図書館において調査した。さらにタイにおける主な歴史学関係の雑誌8誌²について、

創刊時から1998年まで、山田長政についての論文・記事を探した。また、大学院時代にタイ人の友人から得た口コミの情報に基づいて、山田長政関連のテレビラジオドラマのシナリオ等をテレビ局や作家から収集した。

最後に、本論文の構成について述べると、第1節から第5節までは、日本における山田長政イメージを対象とし、第6節に関してはタイにおける山田長政イメージを対象としている。

1. 長政の死から開国（1854年の黒船来航の頃）まで（西暦1630～1854）

山田長政が1630年に没してのち、約70年を経たころ、智原五郎八の2著作、すなわち『シャム国風土軍記』『シャム国山田氏興亡記』³が現れた。両書は、外国への航路、外国の事物及びシャムに渡った山田長政について述べている。1639年からの完全鎖国体制のもとで外国人とともに外国の事物は、出島を除きすべて日本から閉め出されたので、この2書も当局の目を恐れてどこかに隠されていたものと思われる。その後幕府の厳しい鎖国体制も少し緩んできた見え、1707年に当時96歳（一説には89歳）の徳兵衛が『天竺徳兵衛物語』⁴を著している。上記3書は山田長政の同時代資料とすることができよう。何故なら、智原五郎八も徳兵衛も自ら直接山田長政をめぐる事件に遭遇したか、あるいはアユタヤからの情報を自ら耳にした者であるからである。3書は、かなり正確であると思われること、および、山田長政について書かれた後世の書物に材料・原型を提供した点において、重要である。

その後の江戸時代には、いくつもの山田長政伝説が書かれたが、ここでは後世の長政像に大きな影響を与えた次の2書についてだけ述べたい。

その一つは、1794年（寛政6年）に出現した、著者不明『山田仁左衛門渡唐録』⁵である。同書は、柴山柳陰子が語ったことを書き留め、それに著者の考察も加えたものである。柳陰子についても、駿府郊外東押切村（現在清水市押切）の住人、ということ以外分らない。⁶この本には先の3書にはない、新しい要素、すなわち、国粹的要素が付け加えられている。

同書は長政が「日本の武名盛んなるを以て、わが功を成す事を得たり、我又、微賤にして日本の威風を外夷に顕はす事、生前の悦び何事か是にしかんや」と語ったと記している⁷。この記述からは、シャムを外夷、つまり中華の文明の及ばない非文明国として、それに対比して、日本をそれよりも上のものとみて、偉大なる日本のお国のために尽くすことができ嬉しいとしている点に、国粹的思想が読みとれる。同書には、長政は日本のお国のために貢献したいという意図をもって、シャムに来る日本の商船の便宜を図り、シャムと日本との貿易の促進を図った、とも記されている。また、長政が神道を奉じていたことを示すような次の記述もある。即ち、「我本国にありしとき、駿府の総社浅間新宮は靈徳尊く神威盛んにましませば、日頃殊に敬拝す。今ここに来たりて軍艦を造り戦場しばしば勝利を為す事を得し事、日本の神徳の冥護にあらずんば、争でか我軍功を為す事を得ん。これに依って戦艦を図し、絵馬に易へて神殿に奉納せん」（下線筆者）⁸と。長政が浅間神社に奉納したとされる絵馬の写しには、願い事があったことに対する感謝の言葉が入っている。これは浅間神社の神様への感謝を示すものと理解されるが、上記引用文では、一神社への感謝を超えて、「日本の」神徳への感謝となっており、のちに国家神道的思想へと導かれて行く萌芽が見える。

これに続く平田篤胤は1813年に『気吹おろし』⁹の中で、柳陰子の作った国粹主義的長政像をそのまま踏襲した。篤胤が本居宣長と並ぶ、著名な国学者であったことから、『気吹おろし』が思想界に与えた影響はきわめて大きく、同書は長政イメージの形成に大きく与ったものと思われる。篤胤は同書の最後の部分で、長政のことはあまり人に知られていないことなので、ここに話すことによって、「能く覚えて、大日本魂の外国に渡りたる時の手本ともすべきで御座る」¹⁰と述べている。この「日本魂」というのは、日本人のみが持ったすぐれた精神という意味であり、後の長政伝の中で、しばしば引用されるようになる。

その後開国の少し前、1850年には、幕府の命で往時からその当時に至る海外との交通、貿易について記した『通航一覽』¹¹が編纂された。また、山田長政についての記述を含む、いくつかの書物が書かれた。これらの書物は、外国からの圧迫を受けて開国へと向かわざるを得なかった当時の日本の外国への関心の高まりや、開国へ向けての準備作業の現われと見ることができる。

2. 開国から第一次世界大戦勃発まで

本節では、まず、明治期の長政像を、小学校教科書の記述を通じて検討し、続いて一般書の中の長政像について見てみたい。

2-1. 小学校教科書の山田長政像

開国後、明治維新により、幕府や将軍から明治政府、天皇へと政治の主体が移り、国内の諸改革が行なわれたが、教育もその一つであった。1872年に学制が發布され、これに基づいて全国に小学校が設けられた。そこで使用される教科書は全国民を対象としたものであった。この時期以降の教科書の持つ影響力は、それ以前の一部の読者を対象とした書物に比べて飛躍的に増大した。

山田長政研究の資料として、教科書の重要性は次のように指摘できよう。第一に、教科書の中に山田長政が登場する頻度が高いこと、及び扱われる量の多いことである。第二に、教科書は毎年出版されるので、山田長政についての記述の変化を小刻みに見て取ることができることである。第三に、読者数の多さである。教科書は義務教育制度の下で使用されたので、極めて多数の児童が目にしたのである。第四に、特に戦前期の教科書は政府の統制が強かったので、政府の意向を探るためにも、教科書は格好の資料であることである。

この時期の歴史、国語、修身の3教科の教科書の中に、長政は長期に亘って、かつ頻繁に登場している。¹² 巻末第1表から明らかなように、なかでも歴史教科書に7回と最も数多く登場する。しかも、長政が歴史教科書に初めて登場したのは1879年であり、それは3教科の中で最も早いものである。1892～3年になると、3教科すべてに長政が登場するようになる。

『日本教科書大系 近代編第20巻』は、歴史教科書は「幕末において刊行されて普及していた日本歴史書を平易簡略に書き改めて印刷したのであって、初等教育の学校に於ける歴史教育の考え方、或いは教材編成の基本方針がまだ十分に立てられていなかった。…当時の日本歴史の教科書は江戸時代以降の漢文体の史書をもととしてあるために、幼童のために編集したとは記してあるが、その多くは、漢文を仮名交じりの文体に書き下ろしたに過ぎないもので、多数の児童の読解能力をもととして編集した教科

書ということはできない」¹³と記しており、近代教科書草創期の歴史教科書は、江戸末の歴史書をそのまま用いたことがわかる。それ故、江戸末の歴史書にも、山田長政は登場している筈であり、山田長政は開国以前から日本人読書階級にはよく知られていたと推測できる。

第1表によれば、歴史の教科書の中では、長政像は時期によって大きく変化しており、それは次の3つの時期に分けることができる。即ち、第1期は1879, 82, 83年,¹⁴ 第2期は1888, 93年, 第3期は1898, 1900年である。第1期においては、長政はシャムの外寇を防ぎ、国内の反乱を鎮めるなどの功績により国相に昇ったことや、六昆（リゴール、現在のナコーンシータマラート）の王に封ぜられたという記述にとどまっている。しかし、第2期には、長政はシャムで手柄を立てた後、六昆に封ぜられ、更にシャム王の王女を妻とし、シャムの国政を代行したという話が付加される。ところが、第3期になると、第1期と同様の長政像に復帰し、貴族に列せられたと記すだけで、シャムの国政を握ったという記述は見られない。第1期、第3期の長政像は歴史史料に見る長政像に比較的近い。

第2期には、王女を娶り国政を代行するなどというフィクションが加えられ、大きく歪められたものになっているだけではなく、長政がシャムの摂政であったときに、日本の幕府に「忠誠を表した」等と記し、日本の国威をことさらに強調する記述が目立つ。第2期の著者は、長政の力が大きかったことを誇張する意図をもって記したものと推測される。さらに、第2期の1892～93年時には、歴史だけではなく、国語、修身の教科書も長政を取り上げるに至り、しかも国語の長政像は歴史の長政像と同一である。このように3教科ともに長政を取り上げ、かつその長政像が歪められているのは、この時期に何か大きな変化が生じたことを示しているのではないだろうか。

長政像変化の要因としては、この時期における教育および教科書において2つの大きな変化があったことを指摘しておきたい。その一つは、学制改革と教科書検定である。1885年に内閣制度が初めて設けられ、初代文部大臣として森有礼が就任した。彼は、文部大臣に就任すると、直ちに学校制度全般にわたる改革に着手し、1886年3月～4月に4つの学校令、すなわち、「帝国大学令」「小学校令」「中学校令」「師範学校令」を公布した。これによって学校体系の基本を定め、その後の学校制度改革の基礎とした。森は、国体主義の教育を提唱し、日本を世界列強と並ぶ第一等国の地位にまで高めるため、富国強兵の教育政策を立案した。また、従来教育は府県の管理下にあったが、学校令以後は国家による管理体制が採用された。同時に「小学校令」においては、教科書の検定制度を定めた。これは文部省が民間の教科書の検定を行うものであったが、文部省は自らも標準教科書を編纂して、民間の教科書に基準を示し、教科書の改善を図ろうと試みた。

2つめの要因は、国民教育の基礎を確立すべきであるとする主旨により、1890年10月30日に、教育勅語が発布せられたことである。教育勅語は1879年の「教学大旨」に示された皇国思想の流れの上に国民道徳の基本を明らかにしたものであり、その後の教育全般を強く支配することとなった。これは教科書の上にも、大きな影響を及ぼした。

以上から、国家主義的教育体制が第2期に固められ、それ故この時期における小学校教科書（歴史、国語、修身）の中の山田長政像も国家主義的思想の影響を受けて変化したものと推測されるのである。

この時期は、思想面でも大きな変化が見られた時代である。たとえば、1880年代にアジア主義という

重要な思想が生まれている。アジア主義とは、1つの思想といえるのかと、竹内好が疑問視したほど、時期および唱える人によって変化するが、¹⁵ 共通点は、侵略を手段とするか否かを問わず、アジア諸国の何らかの形での連帯を唱える思想であった。竹内はアジア主義の発生の基盤として幕末から維新後にかけて対外発展、海外雄飛の思想があり、この思想が近代国家の形成によって膨張主義に転じたとしており、¹⁶ 伊藤友信もアジア主義はナショナリズムを基礎としている、と指摘している。¹⁷ 加えて、この時期に、南進論の高揚があったことも見逃せない。南進論とは、矢野暢の定義に従えば、南洋を日本の利益圏として捉え、南洋への進出を正当化する外交イデオロギーのこと、¹⁸ である。明治期以来の日本の外交は、北進論と南進論の間を揺れ動いたが、初めて南進論がまとまって噴出した時期は、教科書の第2期と重なっている。

アジア主義と南進論の勃興も、第2期の教科書の山田長政像に少なからず影響したものと考えられる。

2-2. 一般書の山田長政像

次にこの時期の一般書物上の長政像をみてみたい。長政についての最初の記述が現れるのは、1875年の大鳥圭介等著『暹羅紀行』の一部である「暹羅紀略(下)」においてである。同書は、同年工部四等出仕であった大鳥他数名が政府の命を受け、シャムの国情を視察した際の報告書である。当時、シャムと日本との間には未だ国交が存在しなかったため、大鳥らは在日オーストリア公使セッファーがシャムに赴任する機会を捉え、これに同行した。同書には「山田長政の説」と題した1節がある。大鳥は、プラチャオ・プラサート・トーン王(重臣のオークヤー・カラーホームが王位についた時の名)、とは山田長政のことではないか、この王は出拠系統詳らかならずと史書に記されているが、その著者が長政の履歴を記録することを忌み、曖昧にした疑いがあるのではないかと推測している。¹⁹ これが、長政がシャム王になったとする説の初出である。

1887年の森貞次郎著『山田長政シャム偉蹟』²⁰では、ソントム王の死後、その2人の王子が相次いで王位につくが、暗殺されたり、幼少にすぎで国政が上手く行かなかったりしたので、長政が諸侯に推されて国王となるが、オークヤー・カラーホームとその愛人となった亡きソントム王の妃が長政を毒殺して、国政を握ったと記している。

1892年の青池晁太郎の著作²¹になると、長政は国民に推戴されてシャム国王になるが、常に日本のことを忘れず、日本との取引を盛んにし、日本の声誉を揚げ、威厳を保つことに余念なく、飲食衣服から市街区画まで日本の制度に習ったため、シャム人に嫌われ、太后(亡きソントム王の妃)の党が反乱を起こし、長政は死亡する、と一層詳しい内容になっている。

同年の関口隆正著『山田長政伝』²²では、ソントム王亡きあと、シャム王室には血なまぐさい王位継承争いがおこり、その結果跡継ぎがいなくなり、国民は自らの意思で長政をシャム王に推戴する、しかし長政は国民の不満を招き、毒殺される、となっている。

同じく1892年の間宮武著『山田長政偉勲録』²³は、当時の日本の対シャム観の一端を表している。同書によれば、東南アジアにおいて、政府と法があるのは、安南、シャム、ビルマの3国である。しかし、安南は清仏の2国の支配を、ビルマは英国の支配を受けているような有様であり、シャムもイギリスと

の戦いに負けてから疲弊している。今日、長政の事蹟を書く人がいるのは、その著者が、現代の長政が出現することを待望しているからである。現代の長政がシャムを危機から救い、インド諸国の盟主になり、西洋を追い出して東洋を元気にすることを待望しているからである、と。これはアジア主義思想の展開と言うことができる。さらに、同書は、長政は浅間神社を信じているので「このように異国に誉れを揚げ、日の本の勇威を顕すも、ひとえに神のお助けである」²⁴と語ったと、している。ここには国粹思想も見ることができるのである。同書は、山田長政を、日本のアジア主義的領土拡大の手本として登場させた嚆矢である。

1893年の『日本百傑伝 第12編』²⁵ではこの国粹面がエスカレートしている。同書には、「長政は日本の幕府にしばしば謀して、政を報し、方物を大府に納れて恭順の意を表したり」といった記述が見える。

同年の渡辺修二郎著『世界における日本人』²⁶では、長政がシャム王になったという説を否定している。渡辺は、大鳥の説とボーリング(Bowring)の著書 *The Kingdom and People of Siam* とを比較検討して、長政がプラサート・トーン王であったとするのは誤りで、長政はシャム国の一侯にすぎなかった²⁷とした。当時、『世界における日本人』は広く流布した²⁸といわれているので、渡辺の長政論もその後の長政像に影響したと考えられる。渡辺がこの本を書いた目的は、南進論の鼓吹にあった。日本が国を維持し、かつ条約を改正するためには、国力伸張・国富増進が大切であり、そのためには領土拡張が重要である。しからばどこへ行くのか、北進よりも東南アジアから豪州に至る地帯への南進が大切であると説いている。本書において長政は、過去における南方への領土拡大の英雄と位置づけられている。しかし、長政はシャム王ではなかったとしているように、その長政像に誇張や歪みは少ない。

翌1894年の桃川燕林の講談²⁹及び上木浩一郎の『駿河名勝遺跡』³⁰では依然長政はシャム国王になったと記している。

1897年に『シャム王国』³¹を書いた阿川太郎はシャムに渡ったアジア主義者であった。『シャム王国』の「序」によれば、彼は1894年支那一年の漫遊の帰途上海で、岩本千綱と石橋禹三郎による日本人のシャムへの移民計画を聞き、シャムに興味を持った。同年6月シャムに渡り、同国内を一年間視察した結果、「商品の多くは外国製品であり、しかもそのうちの70%は日本製品なのに、それを扱っているのは中国人であることを知り」、日本に帰国して商品を集めバンコクに雑貨店を開いた。彼が同書を著した目的は次の通りであった。すなわち、西洋諸国が東洋諸国を併合する事を望む今日、東洋において独立国であるのは日本、支那で、半独立国であるのはシャム、朝鮮である。日清戦争は一時の驟雨にすぎないのだから、独立国日清は親密になるべきであり、さらに日清両国は半独立国を扶助して、その亡滅を救うべきである。³²同書は、義侠なる日本人の注意をシャムに向け、その亡滅を救うことを意図した。同書の内容は一般的なシャム案内であるが、長政に関する記述はシャムへの殖民といった当時の状況を反映している。すなわち、長政がシャムの日本人町に来ると、その実力でたちまちのうちに町一番の勢力者となり、ここに「一大殖民地」を作ったと記している。³³

1898年には『少年世界』³⁴という当時のポピュラーな少年向け雑誌に、森鳥城の短編小説「山田長政」が掲載されている。この短編小説では「海国男子」というその後長く山田長政の形容に付される語が、

初めて使われている。この言葉の使用は海軍拡張の時代を反映しているのではないだろうか。また同書では、長政がシャム王になれなかった理由をつぎのように述べている。曰く、長政がシャムを征服しようとするれば出来たが、そうしなかったのは、自分を取り立ててくれたシャム王の義に感じたからである。³⁵ しかし、その代わりに山田は六昆を平定してこの地をシャム国王からいただき、第二の日本帝国を建てたのだ。国王の恩に感銘した長政は幼王を補佐する遺命を守った。だが、長政は奸賊オーカー・カラーホームによって毒殺され、シャム国の幾百万の憐れむべきシャム人は長政の死とともに公明を失い、奸賊に膏血を絞られた、³⁶ と。

1899年の遅塚麗水の『山田長政』³⁷も少年向け小説であり、大手出版社博文館が著名文学大家を招いて、毎月1回1冊発行した全巻50冊のシリーズものの1冊で、おそらく人口に膾炙したであろうと思われる。

日露戦争(1904～5年)の前後から、日本人の海上での活躍と長政を結びつける傾向が強く現れる。これは、日露戦争における海軍の活躍によって海軍の重要性が高まったからだろうか。まず、1903年に海軍編集書記であった谷信次が、『海の大日本史』³⁸を著した。1904年の伊藤銀月の『日本海賊史』³⁹は2年以内に第6版まで出て、非常に売れた本であるが、日本人を海賊にたとえ、強いのに植民地を作れないところが、海賊に似ている、としている。⁴⁰

この時期の一般書に見られる山田長政像は、同一時期の教科書に見られる山田長政と、ある期間は異なる弧を描き、ある期間は同じような弧を描いている。一般書では最初から山田長政はシャム王であった、としており、教科書に存在した第1期はなく、最初から教科書の第2期のような山田長政像が描かれている。しかし、教科書の第3期とほぼ同じ頃から、すなわち1898年の森鳥城のころから、長政像が変化して誇張や歪みの少ない、長政像が表されるようになっている。

3. 第一次世界大戦勃発から1932年まで

この時期、教科書には山田長政は全く登場しないので、本節では一般書における長政像だけを見ることとする。

1919年に、大町桂月は山田長政についての伝記「山田長政」⁴¹の中で、当時の日本の執政者が長政のような人物を用いて遠征の軍を起せば、英国にとってのインドのように、シャムは日本のものとなっていたらと述べている。⁴²

1921年に後藤肅堂は「山田長政とシャムより奉納せし絵馬について(上)」⁴³の中で、シャムが今日独立国であるのには、いくつか理由があるが、その1つとしては、古い時代に日本魂を吹きこまれたことをあげている。⁴⁴ 後藤は、長政の事例を、桃太郎の権化であり、大和男子の意気を海外に輝かせた、誇るべき人物として挙げている。これは日本をアジアの盟主と見るアジア主義的シャム観の反映したものといえよう。⁴⁵ この他に、後藤は、1915年(大正4年)11月10日の大正天皇の即位式に長政に贈位した宣命書があると記しているが、これもこのような長政観を反映していると言することができる。

1925年に新村出は、長政の出世について新説を出している。それは、長政が一時シャムの関所の1つで、輸出入貨物の税関を支配していたことから、長政は財政の方面から出世したのではないか、⁴⁶ とい

うものである。この説は疑問である。当時のシャムの都アユタヤはシャム湾よりチャオプラヤー川を遡ったところにあり、従って交易都市アユタヤに向かう海外貿易船はシャム湾からチャオプラヤー川を遡らなければならなかった。長政とその率いる日本人軍がチャオプラヤー川を守ったという記録はあるが、チャオプラヤー川の関所で長政が関税を取る仕事をしていたという記録はないからである。

大仏次郎の著に、1930年9月から31年12月まで月刊雑誌『少年倶楽部』に掲載され、後に単行本になった「日本人オイン」⁴⁷がある。山田長政とシャム女性とのあいだに生まれた混血児、オインを主人公とした異色の「長政もの」である。オインは『少年倶楽部』の読者と同年齢くらいの、おそらく14、5歳の少年のように描かれている。題名では、混血児であるオインにことさらに「日本人」と付しているが、それは作者の執筆目的が、読者に理想の日本人像を指し示すことにあったからであろう。彼は、この作品の中で、理想の日本人像を山田長政とシャムの日本人町に住む人々の姿を通して描いているのである。例えば、長政が若かった頃の話として、仕事がなく「日本の国で仕事がないなら無理に自分で探すより、他の者に譲ってやろう、自分はどこか海外へ行って、一本立ちで働いて見せる、そう思っていた」と、書いている。これは当時の日本で失業率が高く、盛んに海外殖民が奨励されていた状況を反映しているだけでなく、作者も海外に働きに出て行くことを積極的に勧めているように読むことができる。また、同書は日本人町の人々を次のように描いている。日本人町の人達は、我慢強く生き生きと勤勉で、異郷にあっても、こつこつと自分の生活を築いていく、正々堂々として、ずるいことをしない、自分達が住むことになったこの国の人に恩義を感じ、シャム人と仲良く付き合い、また、隣の国から軍隊が攻めてきたときには、自ら進んで武器を取り、シャム軍に加わった、と。長政については、できるだけ早く成功して日本へ引き上げることだけを考えるのではなく、日本人としての良い点を残しつつも、シャムの間人になりきろうとしたこと、すなわち、人にも土地にも馴染むことを大切にすることを評価している。この作品の長政は、従来の長政像とは違って、彼のメンタリティ面まで描かれている。しかし、長政の親タイ的態度と同時に、同書は植民地支配的、南進論的要素を持っていたことも否定できない。例えば、この物語の最後近くで、長政亡き後、日本人町は焼き払われ、逃れたオイン達日本人は、タイの南の国境地帯に新しい日本人町を作ったこと、そこにはシャム人も、支那人も、南太平洋からきた人達も共住していたこと、を述べている。当時日本は、満州事変を起こした直後であり、南太平洋諸島（赤道以北の）に対しても委任統治領として実質的支配をしていた時代であるから、ここに日本の理想の植民地の姿が描かれていると読むこともできる。

1932年5月から9月にかけて雑誌『日本国民』に掲載された、中村吉蔵著「山田長政」⁴⁸という戯曲では、長政はソナム王の王女と結婚したという筋立てになっている。この結婚により、長政は忠義心と野心との間で板ばさみになり、苦悩する。つまり、亡きソナム王への忠義心から、その直系の血筋の者に王位を継がせようと思う一方で、長政自身、ソナム王の娘と結婚したのであるから、シャム王になる権利があるはずであると考え、なりたいと思う心を抑えることができなかった。しかし、長政が結局王位につけなかった理由として、異国人であったこと、また、長政自身も日本人であることから脱却できなかったことを挙げている。長政に、「たとえシャムの国王となっても予は心から日本を忘れることは出来ぬ。日本にはそむけぬ人間じゃ。さすれば予はシャム一国に対して遂に二心の王となり、シャ

ムの人民に対して、仮面かぶりの王様となろうではないか」と語らせているのは、この例である。また、長政がオークヤー・カラーホムの臣下のチャントホウに毒を盛られた時、長政を診察したシャム人の医師は長政に解毒剤を与える代わりに、解毒剤と称して毒を与えたと描き、異国人を好まない、シャム人を表現している。

4. 1932年から第二次世界大戦終結まで

この時期には、山田長政像は激変する。その理由を、当時日本が置かれていた特殊な国際環境および日本国内の政治的、経済的、社会的、思想的状況と切り離して考えることはできない。

第一次世界大戦後から続いた、日本外交の国際協調主義は1930年代に変化した。その原因として2点を挙げることができる。第1は、日本の海外への経済進出が東南アジアの植民地保有国の許容度を越えるほどに急激となったことであり、第2は日本の政治、軍事指導層の中で既成の国際秩序や国内政治体制を打破しようとする勢力が力を強めたことである。その結果、満州事変をめぐる列強との対立に端を発して、日本は国際連盟から脱退した。さらに南進論が、1936年8月7日の5相会議決定「国策の基準」によって国策として制定された。1941年12月8日、日本はハワイの真珠湾攻撃によって太平洋戦争へと突入する。日本は東南アジアの民族主義者の支持を得るために、タテマエとして、植民地体制打破とアジア解放とを戦争目的として掲げざるを得なかった。また、日本国内においても日本国民、特に青年層を戦争に動員する上でもタテマエが必要であった。⁴⁹

日本の指導部は、この戦争を正当化し、日本国民大衆を惹きつけるために南進論を必要とした。ここにおいて、初めてこれまで相互に接点をもたなかったアジア主義と南進論とが接合することとなり、大東亜共栄圏の思想となった。

山田長政も、大東亜共栄圏の理想を体現した南進の英雄として新たなイメージを与えられて、日本人の戦意高揚のために利用された。

この時期は山田長政について一般書のみならず、教科書、研究書の分野でも、多数の著作が書かれた。一般書としては、これ以前の時期からの継続として、少年向け山田長政本が多数出版された。本稿が扱う5つの時期を通じて、山田長政の一般書は35冊が存在するが、このうち1932～45年の間に書かれたものは、17冊である。なかでも、1941年と42年に集中しており、1941年は3冊、1942年は4冊に上る。

教科書については巻末第2表の「昭和初期の小学校教科書に見る山田長政像」に示す通りである。

ここでは、教科書と一般書に分けて、その内容を詳細にみて行きたい。

4-1. 小学校教科書の山田長政像

山田長政は1900年の歴史、国語の小学生向け教科書の中に現れたのを最後に、約40年もの間、代表的な小学校の教科書から姿を消していた。長政が再登場するのは太平洋戦争が勃発した1941年である。その一つ『初等科修身二』⁵⁰が山田長政に言及した理由を、同教科書の教師用分冊は、日本の子供に「海外雄飛の精神を鼓吹し、大東亜共栄圏の建設に邁進するの心構えを養わせようとする」ためであると説明し、さらに「歴史的に見れば、肇国以来、日本国民はしばしば海外に雄飛してきた。長政は室町

時代から桃山、江戸初期にかけて、南方発展した我が国民の代表的な一人である。日本人のために万丈の気を吐き、風雲に乗じた豪胆さは児童に学ばしむるところ。我が国民が、海外に進出するのは、私利私欲をはかるといような角度からであってならず、例として、長政は遠く海外にありながら、日本のためにつくした心構えの尊さを誉め、また長政が海外にあって、シャムの人々に親しまれ、且つ厚い信頼と尊敬を受けた点について、大国民たるの資質をもつことを子供たちに理解させる」ことと述べている。

山田長政は大東亜共栄圏思想を補強・強化するために、教科書の中で、戦争の道具として利用された。教科書の中の山田長政像は戦争遂行という政治目的に奉仕するのに都合がいいように、歪曲された虚像が作られた。例えば、山田長政が、シャムの宮廷で出世した点に関して、教科書では個人の立身出世や栄達とは描かず、「日本のためにつくした」としている。更に山田長政とシャムの一般市民との関わりについて、日本側の史料は何も語っていないのに、教科書では長政は「シャムの人々に親しまれ」、「尊敬を受けた」と断定している。

4-2. 一般書の山田長政像

1938年(昭和13年)に南進論者の竹越与三郎はその著書『倭寇記』⁵¹の中で「山田長政=倭寇=侵略者」の中の大ボスという見解を提示した。

翌1939年(昭和14年)6月に書かれた長田秀雄の短編「山田長政」⁵²も長政を海賊としている。同書では、山田長政は中国の広州湾付近に要塞を持つ倭寇の頭であったが、偶然中国に向かう途中のシャムの朝貢船が中国の海賊に襲われているところを助けたことにされている。それでシャム宮廷の重臣の一人、オーヤ(ママ)・カラーホムの目にとまる。その後、シャムがビルマから、タイ南部のパタニ地方の匪賊討伐を理由に攻撃されそうになった際、カラーホムは、ビルマはスペイン人やポルトガル人などの西洋式兵法を身につけた外国人傭兵をかかえているから、シャムに比べて優勢であると恐れ、ソントム王に長政に助けをを求めることを提案する。シャムの求めに応じて、長政は日本からの援軍とて大船10艘を率いて来暹する。ソントム王は、長政を将軍に任命し、オーヤ・セナピモク(ママ)という称号を与えた、という筋書きである。

1940年(昭和15年)の7月から12月まで、読売新聞夕刊に、角田喜久雄の『山田長政』が連載された。新聞の連載小説であるので、この『山田長政』は多くの人に読まれたものと推測できる。また、昭和16、17年の教科書及び一般書における長政ブームの先駆けとなったものといえよう。同書では、タイをめぐるヨーロッパ諸国と日本とが対立するという構図をとっている。例えば、堺の商人木屋弥三右衛門は山田長政に、「日本は琉球貿易の頃からシャムとは馴染み深い国であるのに、最近になって現れた、蘭、葡、西のために東南アジア諸国を横取りされてしまう。それは日本人がその馴染んだ土地に執着がなさ過ぎ、その国の土になってしまわないからだ」と語り聴かせる。長政はこの話に強いインパクトを受けて、自分こそはシャムに渡ったら、シャム人になるつもりで頑張ろうと決意する。⁵³ そのうち、武功により出世してから山田長政はソントム王に日本との国交を勧めた。長政の勧めに従って、ソントム王が日本に差し向けた使者の中に、長政は自分の家来の伊藤を通訳としていれ、伊藤に秘密の使命を託した。それは、家康に会って、シャムに援兵を依頼すること、もしそれが無理なら東南アジア各

地に散らばる日本人に号令をかける権利を長政に与えるように求めることであった。本件はソントム王の承認も得ていた。山田長政が軍事力を必要としたのは、ヨーロッパの勢力に対抗して日本の勢力を東南アジアに扶植するためであった。

この小説のもう一つの特徴は、長政とソントム王の妹ルタナ姫とのロマンスが復活していることである。⁵⁴ 興味深いのは、長政の武勇を聞き及んだルタナ姫の方が先に長政を好きになる、という点である。当時のアユタヤの国際貿易における重要性や、ルタナ姫の王族としての地位の高さを考えると、ルタナ姫が日本から来た、素性のわからない長政のような人物に恋をするというのはあまり現実的とは言えない。いずれにせよこのルタナ姫と長政のロマンスは、当時人口に膾炙したものと思われる。というのも、翌1941年に当時の流行歌手、東海林太郎がテイチクレコードから、角田喜久雄作詞「山田長政の唄」というレコード⁵⁵を出しているが、その中にも山田長政とルタナ姫との恋のエピソードが出てくる。また、同年、田澤丈夫が書いた『白象』⁵⁶という本の中にも「長政とルタナ姫」という項がある。

1940年7月から8月にかけて地方新聞『新愛知』に篤田健二の「南進の先覚者 山田長政の話」が18回にわたって連載されている。山田長政をテーマとした本のタイトルに「南進の先覚者」という形容詞が付されはじめたのは、この頃からである。篤田健二の描いた長政像で興味深い点は、長政はシャムで志を達した後、使者に託して、書を幕府の老中、土井利勝に呈したが、その内容は日本の南進政策の建白ではなかったか、⁵⁷としているところである。

1942年8月、佐藤春夫は、著作「山田長政の横顔」⁵⁸の中で、従来山田長政について、いろいろな書物の中で言われてきた長政の武功は大袈裟過ぎる、シャム国王が長政を重用したのは当時アユタヤで、盛んになりつつあった西洋諸国（スペイン、ポルトガル、英、蘭、仏）に対して、長政が商業上の競争に勝利を取めたからではないか、という推論を立てている。しかし、この推論を裏付ける証拠は特にあげていない。

同年5月から8月まで『週間少国民』⁵⁹に連載された佐藤春夫著「山田長政」⁶⁰の中では、長政は、通商上の功勞をたてたので、ソントム王から爵位を与えられた、と記している。また、300人近い日本人がタイのペップリーで小独立国のようなふるまいをした、という史実に次のような解釈を与えている。当時、西洋人達は新しくシャムにやってきて、言葉巧みにシャムの国王や役人に取り入って、日本の既得権を奪おうとした。シャムはそれまで長い間、日本と取引があったのに、シャム国王やシャムの役人は、西洋のシャムへの介入によって、日本をおろそかにし始めた。これに不満のシャム居住の日本人達は「シャムの国王や役人に日本人の実力を思い知らせるため」にペップリーでそのように振舞った、と。ところが、シャム王は、カンボジア遠征のために、西洋の援助を求めるが、それを得られなかったのみならずポルトガルなどはビルマとシャムの不和を仕組んだので、シャム王はだんだん西洋嫌いになって長政を信用するようになった、と続けている。

1940年の角田喜久雄と1942年の佐藤春夫の2つの作品では、東南アジアをめぐる、日本と西洋が対立するという共通の構図を読み取ることができる。さらには、タイはもともと日本のものであったという、当時の時代状況に即した自己正当化も見取ることができる。

1942年8月『興亜』に載せられた中田千畝著「山田長政」では、長政を当時日本に流布していた、大

東亜共栄圏、八紘一宇の理想の実現を目指した人物として描いている。渡シャム前の長政の履歴については、長政は織田信長の血を受けた者であり、伊勢御師の手代として働いていた、としている。山田は皇祖神伊勢大神宮の御神徳を仰ぎ、これを日本諸国隅々にまで敷き広めたいと願い、神国日本の隆昌を祈って伊勢御師の手代として、江戸を始め、関東八州に御被い箱を肩に、御神符を戸ごとに配って歩くのを仕事としていた。駿府を通過した際、外国へむかう御朱印船を見て、何とかして、海を渡って外国に行き、神国の日本のありがたさ、万世一系の皇室の御仁徳を伝え広めて、御威光になびかせたいものだ、と思うようになった。南の国に渡って、彼の地で日本男子の意気と力とをもって名を成し、身を立てて、天晴れ渡南の英雄とうたわれるような、立派な人間となり、この目的を果たそうと思ったのである。⁶¹

世界の多くの国々の庶民を一家一族のように天皇が支配することが、天皇の祖の説いた八紘一宇の思想である。中田千畝の山田長政論は、八紘一宇の思想を表現している。

同年の沢田謙著『山田長政と南進先駆者』⁶²では、ソントム王が長政の説く国体の尊厳と武士道の精神に心を打たれ、長政に我が子ゼッタ（ママ）王子の教育を依頼し、武士の魂を王子に注ぎ込むように求めたと記している。これは恰も、シャムが日本の皇風化に自ら進んで、身を差し出す、と言っているようなものである。

同じく1942年の白井喬二著『山田長政』は長政を八紘一宇の大理想を実現しようとした先駆者の一人と位置づけ、長政に次のように語らせている。すなわち、シャムに渡る前、彼は外国へ行って、一旗揚げようという自分の野心しかなかったが、シャムに渡って一年ばかり暮らすうちに日本魂にめざめた。日本にいる時は気がつかなかったが、外国へ出て、世界各国の人種と比べることによって、自分のためより他人に尽くそうとし、自分の身を殺して他人の身を生かそうとする日本人の心の美しさに気がついた。世界の人々が、この美しい日本人の心を学んで行こうよくなれば人類はきっと幸福になれる。また、日本人は世界に比類のない光明に包まれている。それは、万世一系、遠い神代から現在まで永久に変わらない天皇をいただいており、天皇の大御心＝建国以来の目標は、世界を1つの家とし、四海の人を家族として、ともども栄えて行こうという理想を抱き、正しい平和な世界を建設しようということである、と。

これを聞いたソントム王は感動し、ゼッタ王子の教育を長政に任せ、王女を長政の妻に与えた。そして長政に「王子を日本精神で育てて立派な国王になれるよう…それから、王女を愛してサムライの血を受けたよい子を生ませてくれ」と、求めた。「ソントム王がこうしてシャムを日本の国風に倣ったのは正しい。なぜなら、日本のような国柄でなければ、国家は決して強く栄えて行くことはできない。忠と孝とが1つのものとなっこそ、国がよく治まる、忠と孝を实践する立派な国民でなければ、世界人類の手本となり、その頭となれない」⁶³と、長政は考えたとしている。

以上のように、太平洋戦争に突入した時代に、大東亜共栄圏思想、八紘一宇思想を堅持した、山田長政像が作られた。長政は、シャム王の王女を妻とし、「神国日本のありがたさ」、「皇室の仁徳」、「日本魂」などをシャム王に知らしめ、これらによってシャム王を感化した、とまで書かれたのである。

5. 第二次世界大戦終結から現在まで

第二次世界大戦後の日本は、アメリカ占領軍によって、諸制度の大きな変革がなされた。これまでの皇国思想・軍国思想から180度異なる新しい西洋式民主主義思想への急激な転換が行われた。皇国思想や大東亜共栄圏思想によって南進の英雄に仕立て上げられた山田長政像も、戦中の使命を終えた。しかし、山田長政は戦後日本においても消え去ることはなく、新たな長政像が描かれることになる。

戦後10年間について見れば、ただ1件⁶⁴の例外を除いて、山田はマスコミや言論界から姿を消す。

しかし、日本人の山田長政に対する強い関心には変化がなかったと見え、その後も数多くの文学作品が書かれただけでなく、書物以外にも映画、宝塚、舞台、テレビドラマなどへとジャンルを拡大していく。それらの中の山田長政像はもはや明治期から第二次世界大戦終結にいたる山田長政像とは一線を画した異なる像であった。

それでは戦後の山田長政像はどんな特徴を持ち、それは日本のタイへの関心のあり方とどう関連しているであろうか。

1959年に大映映画「王者の剣」が当代の人気俳優長谷川一夫を主人公の山田長政に配して作られた。⁶⁵ この作品は日タイ合同映画で、タイ側はタイの王族が経営する映画会社、アスピン・フィルムが参加し、タイに於けるロケや、衣装に協力した。⁶⁶ しかし、期待に反して、この映画は日本でも⁶⁷ タイでも⁶⁸ ヒットしなかった。篡奪王オークヤー・シーウォラウォング（ママ）にとって、長政は邪魔者なので、王は長政を殺すため、刺客を送る。長政は刺客の差し出した毒入りワインを、毒入りと知りつつも飲み、シャムにおける自分の仕事は終わったと語った。⁶⁹ この映画の中の長政はアユタヤの政治の中で流されるままで、恰も自分の意志を持たない人形のように見える。それはおそらく日タイ合作ということと日本人にもタイ人にもどちらにも受け入れることのできる山田長政像を描こうとしたからではないだろうか。そうであるとすれば、始めてタイ側の「目」を意識した山田長政像がここで生まれたと言うことができるのである。

1969年山岡荘八著『山田長政』⁷⁰では、次の2点を強調している。第1点は、長政がシャムに向けた動機として、日本の抱える大きな問題、すなわち狭小な国土に過剰人口の問題が一層深刻化していたので、これを解決する為にシャムに行った、としている点である。長政は沼津藩主に仕える侍であった。幕府は沼津藩に対して陰謀を企んだ。幕府は隠密を派して藩主の一人息子を殺させて、沼津藩を改易にしたのだ。このことを知った長政も危うく隠密に殺されそうになる。長政は日本の土地が狭いためにその狭い土地を争って大名も武士も上昇、下降している事実を見て、嫌になる。そして海外に行って新しい天地を築いて自分と同じ問題で悩んでいる人々を呼びたいと考えるようになり、シャムに向う。

この作品が強調する第2点は、オランダの陰謀である。オランダはアジア一帯の貿易を独占したいという野心を持っていた。特に利益の多い日本とシャムの間の貿易に目を付け、その妨害を図る。具体的には、シャム国王を脅迫し、幕府には外国にいる日本人は皆キリシタンだと言って、これらの日本人が日本に出入りができないようにさせた。オランダはシャム宮廷の重臣であるオークヤー・カラーホムに山田長政を中傷する。曰く、山田長政はオランダに共謀して、シャムを占領しようと誘った、と。これを理由にオランダは日本人が後押しをしたチェーターティラート王を殺す。さらにチェーターティラー

ト王のかわりに王位につきプラサート・トーン王となったオークヤー・カラーホムを操り、シャムの国益の為には山田を殺さなくてはならないと思込ませる。ここでは長政の死は日シャム貿易をめぐるオランダの陰謀がその根底にある、としている。

1971年岩城政治著「山田長政は誰に殺されたか」ではオランダ東印度会社の第4代と第6代の2代にわたって総督を勤めたヤン・ピーテルスゾーン・クーンは東南アジアにおける利益の多い貿易市場であるアユタヤを制圧しなかった。その為には、実力者山田長政の存在を排除するしかなかったため、その暗殺をはかった、としている。しかしこれらの主張には何の証拠もない。⁷¹

1973年江崎惇著『史実 山田長政』では、長期間定説とされてきたファン・フリートの記述を疑いかつ否定する姿勢が現れ始める。例えばファン・フリートは、オークヤー・カラーホムが王宮にいるチェーターティラート王を討ったとき、日本兵がその軍の中にいたと記述しているが、この記述を基に、歴史家はこの日本兵の中に山田長政がいたにちがいないと解釈してきた。ところが、江崎は長政は加わらなかった、としている。なぜなら、長政は、日本人町の頭領として異国にある日本人の生命財産を守る責任があったため、慎重に行動していたし、シャムの宮廷内の政争になるべく関わらないようにしていたからである。⁷²

江崎の長政像は、長政の死因はオランダの陰謀にあるとした江崎以前のいくつかの作品と対比すれば興味深い。おそらく1969年の山岡荘八の作品の頃からオランダ資料の信憑性を疑問視する議論が生じたのではないだろうか。疑問視する根拠は、オランダと日本は外国交易をめぐる利害関係が真正面から激しく対立していたので、オランダの日本を見る目にはバイアスがかかっていたに違いないと考えられたことである。ファン・フリートはオランダ東印度会社のいわば駐在員であったのであるから、彼もそのようなバイアスからは自由ではなかったのではないかという疑いが、当然生じてきたのである。

1978年12月早坂暁脚本のテレビドラマ「南十字星」⁷³は次のように描いている。オークヤー・カラーホムがソントム王の息子チェーターティラート王を殺して自ら王位につくと、ソントム王の娘スリヨ姫と結婚していた長政は、スリヨ姫に代わって敵を討とうとするが、その前に幕府の密偵に殺される。なぜなら当時長政はシャムで力と人気を得て、キリシタンを保護するまでになっていたからである。長政は幕府の政策と対立する大物になりすぎていたのである。

1980年林青梧著『山田長政』⁷⁴では筆者は、自らの苦渋に満ちた人生経験を通して山田長政を見ることによって、長政像に画期的新境地をひらいた。林は朝鮮渡航開拓民の子であり、第二次世界大戦終結時に現地で筆舌に尽くしがたい辛酸を舐めた。外地で敗者として追われる悲劇は海外渡航者としての長政、そして日本人町の人々の中にも間違いなくあったに違いない、なぜなら、長政は毒殺され、アユタヤの日本人町はシャム王の命により、焼き討ちにあっているのだからと、⁷⁵ 林は考えた。そして海外渡航者である山田長政達の味わったに違いない苦労、悲劇を想像することによって、これまでにない全く新しい山田長政像を作り上げた。加えて、タイ人側から見た山田長政や日本人の姿を描いたのも初めての試みである。

ここでは、山田長政は海外発展の英雄などではなくて、浪人、キリシタンなど海外移住を運命付けられた一団の日本人の生存のために悪戦苦闘せざるを得なかった悲劇の指導者と見られている。山田はど

うして悪戦苦闘しなくてはならなかったのか。それは徳川幕府の鎖国政策によってシャム在住の日本人たちが日本本土から孤立させられたためである。これまでソントム王やシャム人が日本武士を重用したのは背後に徳川幕府がいたからだ。鎖国政策によって日本から取り残された長政達は何とかシャムの支配者グループに取り入ろうと努力する。しかし、シャム人の日本人に対する反感によって長政は殺され、日本人町は滅亡していく。彼は、次のような例を挙げている。すなわち、「それにしてもスペインを相手にしてはあれほど弱く、一人の義勇兵も集まらなかったシャム軍であったのに相手が日本人となるとたちまち大軍が出来あがったのには驚いた。そんなにわれら日本人が恐ろしいのか。この20年間、われらが一体何をした、というのだ。そんなにわれわれが憎いのか」と。長政たち日本人がシャム人の反感を招いた理由として、林は次の4点を挙げている。

1. 日本人はシャム人を見下し、またシャムの習俗をばかにして受け入れなかった。
2. 日本人は武威を誇り、日本人に対してシャム人は畏敬の念を抱いていると思込み、平気で彼らの上に君臨してきた。
3. 日本人は猛々しすぎる。日本人がシャムで勢力を占め始めてから戦争ばかり起こる。日本人も死ぬが、その何倍ものシャム人が死んでいる。
4. 日本人はシャムの土地から搾りすぎる。うまい汁は皆日本人に吸われているから、シャム人はいつまでたっても下積みだ。⁷⁶

これらのタイ人の反感を招いた日本人の行為は太平洋戦争中に日本人が東南アジア諸国で行ってきた行為と同一ではなかろうか。また、70年代前半にタイで生じた反日運動が批判した日本人像とも一致する。山田長政を傲慢な侵略的移民者として見て、加えて戦中に日本が東南アジア諸国で行った侵略的行為に対する反省として山田長政を描いた作品と言える。

1981年の遠藤周作著『王国への道—山田長政』⁷⁷の頃から、長政の死の原因について、それまでのオランダの陰謀により山田長政は殺されたという外因による山田死亡説から、山田自身の内部にある弱さから山田長政は死んだのだという内因による山田死亡説への変化がみえる。

遠藤は人間性の奥深い所に興味を持った作家であるが、この本の中でも、独自の日本人論、山田長政論を展開している。遠藤はシャムの日本人町が完璧に消滅した理由について、日本人の持つ伝統的な2つの弱さがあった、とする。まず初めに、当時の日本人町の日本人たちは日本人町という集団で生活を営んだにもかかわらず、中国人たちと違って、そこに根をおろす事ができなかった。土地の生活に順応せず、日本の食物を取り寄せ、日本的な生活をおくり、絶えず故国を思い、一旗揚げた後、日本に帰ることを夢見ていた。⁷⁸ ここにも70年代のタイの反日運動の批判点と共通のものが見られる。2つ目は、日本人傭兵が固有に持つ弱さである。遠藤は山田長政の本質は傭兵隊長であったとする。遠藤は、長政はシャムで立身出世をしていくために陰險な術策と謀略を徹底して用いたが、西洋人の傭兵と異なり、力の法則に徹した合理主義や冷たさを持たず、情に流されるところがあったと見ている。⁷⁹ 例えば、この小説の中では、亡きソントム王の王女ヨクティープ姫に寄せる長政の恋心がそれである。⁸⁰ 長政の政敵オークヤー・カラーホムは長政のこの弱さを巧みに突いて、長政を滅亡させる。

1987年の陳舜臣著「山田長政」では、長政の弱点は駕籠かきに過ぎず、本物の侍でなかったため、誰

よりも侍らしく振舞おうとしたことにある、と説明している。そこで日本人らしい責任感、日本人としての誇りが顔をだし、政敵によってこれを逆手に取られた。さらに、当時日暹の仲介貿易の利を狙っていたオランダ商人は、オークヤー・カラーホームにそのような長政の弱点を教えて長政滅亡の謀をめぐらした、としている。⁸¹

1993年の窪田篤人脚本「明治座グランドロマン アユタヤの星」⁸²では、初めて、タイを愛した山田長政像が現れる。アユタヤにいた日本人町の日本人たちは祖国へ帰ることができないという無念の思いを抱いたまま死んで行ったのだろうか。そうではない。タイを心から愛し、タイの青い空と緑の大地、さんざめく星空に優しく包まれ、溶け込むように生き、死んで行った日本人たちも大勢いたのだ。これらの日本人たちはシャムを愛し、ソントム王に信頼されていたのだ。オークヤー・カラーホームの陰謀は王位継承ねらいと言うよりも王妃への屈折した愛にもとづくものであった、としている。1990年代は日本においてアジア諸国の異文化への関心が高まった時期であったが、これが長政像にも影響したのだろう。

1993年4月から1994年8月まで読売新聞夕刊に白石一郎の『風雲児』が連載された。この本では長政は武人としてよりもむしろ商人としての素質を持った人物として描かれている。長政がシャムに来たのは、いろいろな偶然の積み重ねの結果に過ぎず、自らシャムを目指して来たわけではない。長政はソントム王に日本人をメナム川の警備役にして欲しいと願い出て、許される。その真意は交易上の利益を狙ったものであった。長政は、日本人達は王宮の争いや西洋人の争いに関わらない方がいい、そしてとにかく武力をつけることが保身となると考えた。ソントム王の死後、王位を狙う国内各派の争いが激しくなった時にも長政は極力どちら側にもつかないようにするが、日本人町の日本人達の身を守るためにやむを得ない時には、日本人の武力を用いてこの争いに加担することもあった。例えばオークヤー・カラーホームが王宮にチェーターティラート王を討った時に、どちら側が勝っても日本人町は生き残れるように長政はあえて日本人親衛隊の陣頭に立たず、部下だけオークヤー・カラーホーム側に送り込む。⁸³ この小説の中の長政は英雄と言うより心暖かい、血の通った人、非凡なる凡人であった。

1996年には岩城雄次郎著『シャム国武士盛衰記』⁸⁴がある。岩城は山田長政を半分に割って、西村正長と、山田仁左衛門長正という対照的な二人の人物を作り出した。前者はタイ語が上手で、タイのことをよく理解した、文人である。後者は武功によって官位を上昇して行く武人である。これまでの長政像は後者、すなわち武人としての山田を見るものが多かったが、岩城は山田に文人としての新しい性格付けを与え、こちらに重点をおいている。岩城は後者の山田長正を中心として描かれた、華やかな従来の歴史の陰には、ごく一部かもしれないがタイ語がよくでき、真にタイを愛し理解する日本人グループがあったことを表現しようとしたのではないだろうか。岩城が描く、タイを深く理解した山田長政像は、近年の日本のタイへの興味の深化を示すものであろう。

6 タイにおける山田長政像

第1節から第5節までは、日本における山田長政像の変遷を見てきたが、本節においては、タイにおける山田長政像の変遷を見てみたい。

山田長政は日本では人気があり、よく知られているが、タイではあまり知られていない。山田について書かれた本は、多くはないだけでなく、ジャンルも限られている。

タイで山田長政を最も早く紹介した書物は、1920年に葬式本として印刷されたサー・アーネスト・サトウの *Notes on the intercourse between Japan and Siam in the seventeenth century* である。⁸⁵ 同書は山田長政研究に先鞭をつけただけでなく、現在においても山田長政研究の最も優れた研究書の1つである。同書の貢献は次の3点にある。

第1に、山田長政についての一次史料を原文から英語に訳して、タイの歴史学界に初めて紹介したこと。つまり、オランダ人、ファン・フリートが著した『シャム革命史話』の簡訳と、日本の『通航一覧』に収録されている17世紀の日タイ交渉の外交文書である『異国日記』からシャム国王と日本の將軍の書簡のやり取り、シャムから日本への使節派遣の部分について、訳出している。

第2に蘭語、日本語、タイ語の3つの言語による同時代資料を比較検討して、たとえタイ語の史料には山田が出てこないとしても、蘭語や日本語による山田についての記録は信憑性が高く史実であると判断したこと。

第3に、山田長政という名の人物が歴史上実在することを示し、さらに、山田長政がオークヤー・セナーピムックであると推定したこと。即ち、『通航一覧』の中のシャム国王と日本の將軍の間の書簡の往復に添えられた山田長政から日本の老中宛の手紙、それに対する老中から山田長政宛の手紙には、山田長政の名前が明記されており、また、ファン・フリートの本の中でソントム王の死後、日本人義勇軍の長に与えられた官爵名はオークヤー・セナーピムックとなっていることから、山田長政の官爵名はオークヤー・セナーピムックであるとした。

1920年代のサトウの研究論文ののち1930年代まで山田長政を扱った書物は出ていない。1930年代になると、タイにおいて初めて山田長政に関する、いくつかまとまった文献が現れる。その理由としては、この時期、シャムと日本の交流が深まり、日本から影響を受けたこと、及び、タイの歴史の父と仰がれているダムロン親王がファン・フリート著『シャム革命史話』の英語およびタイ語への全訳を命じたこと、が考えられる。どうしてダムロン親王はファン・フリートの『シャム革命史話』の全訳に興味をもったのだろうか。その一因は、W. A. R. Wood 著『タイ国史』の出版および著者ウッドとダムロン親王との交流にあるようだ。ウッドの著作は1924年に初めて出版され、1933年に再版されている。著者ウッドはチェンマイ駐在の英国領事として約40年間勤務しており、ダムロンはウッドの執筆に援助、助言を与えた。この交流の過程で、ダムロン親王は、ファン・フリートの著作の重要性を再認識したのではないだろうか。

1934年にダムロンは『バンコック・タイムズ』紙の所有者 W. H. ムーンディに『シャム革命史話』の1633年版仏訳からの英訳を命じており、1938年にムーンディはこれを完了している。同時にダムロンはクン・ウィチット・マートラーに英訳からのタイ語訳を命じたが、この命は一部しか実現されなかった。⁸⁶

1935年にルアン・ウィチット・ワータカーン著『オークヤー・セナーピムックあるいはチャオプラヤー・ナコン（山田長政）の略歴』が刊行された。同書はタイ語12ページ、その英訳9ページから

成っている。ルアン・ウィット・ワータカーンの描いた山田長政像は特にこれといった特徴がなく、日シャム協会会長のプラヤー・サリットディカーン・バンチョンの書いた前書きの方が興味深い。この前書きの中で、長政は重要な人物であり、「外国人とはいえ、山田はシャムで活躍し、官位名を得た。そして、ついには地方の大都市を治めるほどタイ国王の信頼を受けた」としている。さらに、日タイ友好促進の重要性を述べ、日本人が日タイの友好について述べる時、いつも山田長政について言及するので、タイ側も山田について知っておくべきである、と記している。この日シャム協会会長は、親日家であり、当時、タイと日本との友好関係を推進しようとした一人であった。⁸⁷ ルアン・ウィット・ワータカーンの本を出した目的も日タイ友好促進活動の一環であった。同書前書きには、1935年初の日本のプリンスの訪タイ前に刊行したい、とあるので、日本のプリンスに同書を見せる意図で出版されたのであろうか。⁸⁸ また、同書刊行のもう一つの目的は、日シャム協会が当時進めていたアユタヤに山田長政の記念碑を作る計画に資料を提供するためであった。

1937年10月9日付バンコク・タイムズに「日本とシャム—山田長政の記念碑」と題する記事が掲載された。この中で、「9月26日からアユタヤの日本人町跡にバンコク在住の日シャム協会がスポンサーとなって、山田長政の記念碑を建てることになった。そこで、ここでサトウの論文『17世紀の日タイの交流について』を紹介する」と述べている。

1937年10月19日の夜、「山田長政の地位」と題する講演会が開かれ、当時シャム協会の会長であった F. H. ジレスが書いた論文の一部が朗読された。この時は講演会の第2回目であった。⁸⁹ 第3回目は11月2日に開かれた。⁹⁰

1938年4月には、ムーンディによるファン・フリートの『シャム革命史話』の英訳全文と、ジレスの「ファン・フリートの『シャム革命史話』の分析」の一部（第1章から第6章まで）が、シャム協会紀要に載せられた。⁹¹ ムーンディによる英訳がタイの歴史学界に紹介された意義は大きい。山田長政についてタイ側の一次史料は存在しないので、これ以降、タイ研究者による山田長政研究の多くは『シャム革命史話』を基礎資料として用いたからである。⁹² しかし、ファン・フリートの山田についての記述には多様な解釈を可能にする余地がある。

ジレスはファン・フリートの山田記述をどのように解釈しているだろうか。ジレスは1920年のサトウと同様、ファン・フリートの資料は信憑性が高い、としている。しかし、サトウと異なるのは、日本側の資料は信憑性が低い、としている点である。その根拠としては日本の資料の中に出てくるいくつかの事実が誤りであることを挙げている。

ジレスはファン・フリートを用いて、山田の性格を分析した。彼は、山田の長所としてソントム王への忠誠心を挙げている。例えば、ソントム王が長男を次期王位につけるため山田の助力を頼んだとき、山田はソントム王への強い忠誠心からこれを引き受けた。⁹³ 山田のもうひとつの長所として、命の危険を顧みずに友人の命を助けたことを挙げている。山田の短所は甘言に弱いことである。例えば、オークヤー・カラーホムの抜け目のなさと、弁舌の巧みさに負けて甘言のわなに落ち、最後に命を落としたこと、など。⁹⁴

ジレスはシャムにおける山田の地位は高かった、と見ている。山田がシャム国王や外務大臣からかな

り信用されていたことは、1621年にソンタム王の手紙に添えられた山田から老中宛の手紙からも明らかであり、山田が宮廷で重要な役割についていたことは山田がオークヤー・セナーピムックの官爵位を与えられたことから明らかである、と論じている。⁹⁵

ジレスの後、山田長政はしばらく、タイの歴史研究の出版物からは姿を消す。再び現れるのは、1967年のカチョン・スカパーニットの論文においてである。1967年といえば、タイの政治は軍部独裁制の下にあった時期である。この時期研究者たちは、緊張した政治状況の影響を否応なしに受けた。この暗い雰囲気の中で、新しいタイプの「専門的歴史家」と呼ばれる、歴史研究者達が現れてきた。この歴史研究者たちは、ロイヤリストの王朝年代記のフレームワークと国粋的な感傷とを特徴とした、と評されている。⁹⁶ この新しいタイプの歴史家の中でもめざましい活躍をしたのが、次に述べるカチョン・スカパーニットとローン・サヤーマーノンであった。

1967年カチョン・スカパーニットは「エーカトッサロット王時代の研究」という論文の中で、タイの官僚機構の中における山田長政の迅速な出世は山田が日本の高官を知っていたからである、と論述している。⁹⁷ 筆者はこの解釈には賛成できない。山田は日本にいた時、大名の駕籠かきに過ぎず、最底辺の侍であった。従って、老中などという日本の政治の中枢を知っていたはずはないからである。

1971年にローン・サヤーマーノンは『アユタヤ時代の歴史』の中で、オークヤー・カラーホムの山田に対する態度について「オークヤー・カラーホムも山田を堂々と粛清できなかったもので、間接的にこれを倒す方法を探した。」⁹⁸ と述べている。この文章は、プラサート・トーン王は政敵を自分の手で殺したわけではないとすることによって、同王のイメージを変える目的で書かれたものであった。

1960年代のタイはベトナム戦争の時代であり、アメリカや日本からの投資も増加した。1968年と1971年の2回に亘り、総理大臣タノーム・キッテイカチョン陸軍元帥は、日本の青年団を歓迎する演説の中で、日タイは昔から友好関係にあり、その象徴としての山田長政はタイの官僚となり、活躍して、オークヤー・セナーピムックという高い位についた、と述べている。⁹⁹

1972年の中学2年生向けの歴史の教科書にも、山田長政が登場する。¹⁰⁰ タイの教科書で山田に言及したものは、珍しい。同書は、山田長政はソンタム王時代に日暹の友好を促進した人物であり、オークヤー・セナーピムックの位につき、ソンタム王に忠誠を尽くした、アーティッティヤウォング王の時にナコーンシータマラートの領主になった、と記している。

1973年から1976年にかけては山田長政を批判する書物が数冊出版された。その背景として、当時タイの対日貿易収支の大きな赤字という経済問題から、日本への批判が生じ、それは山田への攻撃という形としても現れたことが考えられる。

1973年にサン・パッタノータイが、『プラサート・トーン王』を書いている。サンは山田時代の日本人はシャムの政治に影響力を持ちすぎていた。例えば、日本人は好きな人物をシャム国王に据えたり、シャム国王を殺すこともできた。プラサート・トーン王が日本人のシャム政治への影響力を駆逐したのは王の勝利であった、と述べる。¹⁰¹ これは明らかに日本人のシャム国政への影響力の過大評価であり、歴史事実を歪めたものである。事実上、日本人としては一番大きな政治力を持った山田ですら、プラサート・トーン王の王位篡奪の手助けをしたに過ぎないのであるから。

1975年タンヤー・ボンアーナンは「日本に対する抵抗—山田から田中まで」の中で、当時の日本の経済進出に対する抵抗の道具として利用するため、意図的に歴史を歪めている。彼の記するところは、次の通りである。

シャムの日本に対する抵抗は、アユタヤ時代から現代まで続いている。アユタヤ時代山田長政は政治力、経済力、軍事力を持っており、貿易の利を得るために特権をふるった。プラサート・トーン王は山田と利害衝突のため、山田をナコーンシータマラートへ送り、この地で山田は没した。山田の息子は父の敵を討つために、タイ人と戦い、カンボジアに逃れた。日本人がタイから去り、タイ人は喜んだ。現代に目を転じれば、利益を共にするタイの政治家を通して日本人はタイの法律や政策に圧力をかけつつあり、日本人のタイにおける政治力は増大しつつある。アユタヤ時代には、山田がタイの政治に干渉したので、プラサート・トーン王は日本人を追い出した。日本人は、その過去を教訓として、どうすべきかを考えてほしい。もし、日本人がこのまま自己本位の利益追求を続ければ、タイ人はかつてそうしたように日本人をタイから追い出すかもしれない¹⁰²と。

同年、ソムバット・チャントラウォングの論文「ファン・フリートの政治思想、あるいはプラサート・トーン王の対外政策」が著された。彼は、オークヤー・カラーホームが王宮を攻撃したとき、山田はこれに加わっていたかどうか、という論点について、山田の心中には相変わらずソンタム王への忠誠心があったが、情勢は攻撃側に有利であったので、これに加わることを余儀なくされた、としている¹⁰³。

1980年にニティ・イオウシーウォンは『ナライ王時代の政治』と題した一書を物した。同書は、ナライ王時代およびそれ以前のアユタヤ政治における国王と貴族との間の王位争いについて分析したものである。同書は、当時タイの支配階級にとって、外国人の傭兵を使うことは必要であった、と述べ、次のように日本人義勇軍の状況を分かりやすく説明している。

エーカトッサロット王からプラサート・トーン王まで5人の王の時代には、貴族たちの権力が増大し、王は貴族の同意なしに国を治めることができなかった。プラサート・トーン王に至っては、貴族が国王になったものである。「貴族の権力を弱めるため、プラサート・トーン王は次の2つの方法を用いた。まず第1に、直接的に統治貴族の権力を断ち切ることで、次に外国人がタイ官僚機構の専門職に入ってくるのを推進すること。その結果、遂に外国人専門職側が統治側のタイ官僚を圧するようになった」。数からみれば、外国人近衛兵は貴族の抱える平民よりずっと少ないとしても、権力を倒すときにはすばやく任務を遂行できた。密かにグループを作り、王宮の中でクーデターを起すことができたので、近衛兵の方が権力奪取に効率的であった。これが、オークヤー・セナーピムックの義勇軍がソンタム王からプラサート・トーン王時代にかけて、政治的重要性を持った理由である。タイ国王にとって、外国人はタイ人よりも信頼できた。その理由の一つとして、外国人はシャムに深く根をはった権力基盤を有しない。タイ官僚機構における地位も、一に国王のお慈悲にかかっている。外国人義勇軍には、タイ人の平民を支配する権限を与えられていない。つまり義勇軍の構成員は、その長と同じ国の出身者か、私生子分であった。以上のような様々な要因から、シャム国王は、外国人傭兵に魅力を感じたのであった。特にシャム国王が統治貴族の権力を弱化させる必要があったとき、国王は意図的に外国人をタイ官僚機構に登用したのである。しかし、外国人傭兵にもまた、問題が存在した。ある特定の国の外国人が増え

すぎると、団結して、王の意に反して、クーデターを起こすかもしれない危険性である。¹⁰⁴

1983年10月11日には、現国王の母であるシーナカリン殿下の庇護下にある、医療ボランティア財団が制作した、テレビドラマ『山田』が放映された。慈善事業基金に、寄付を募るためであった。ドラマを放映する前に、司会者がこのドラマを作った目的として、次のように述べた。すなわち、ソントム王の時代に活躍した日本人義勇軍の山田長政の栄誉を広めたい、タイ人、外国人を問わず、賞賛するに足る良いお手本は賞賛すべきであるから、と。あらすじを追ってみると、このドラマが主張したいことは、山田のソントム王に対する忠誠である。ソントム王のためなら、命さえも捨てて惜しまない山田が描かれている。このドラマはタイ王室賛美の時代潮流の一つといえることができる。

タイにおける山田長政像をまとめてみよう。タイ人は日本人ほどには、山田に興味を有していない。1920年のサトウの翻訳を除き、タイで山田長政についての言及が始まったのは、1935年のルアン・ウイット・ワータカーンの著作からである。同書におけるプラヤー・サリットディカーン・バンチョンの前書きからも明らかなように、この時期に山田長政が取り上げられるようになった理由は、日本人が山田長政に深い興味を持っていることを知って、初めてタイ人にも山田への関心が生じたのである。これは、日タイ友好を促進するために、タイが日本に気を使った結果である。つまり、タイにとって、山田は無名の存在であったが、日本との交流において始めて知られるようになったのである。

1970年代にサン・パタノタイとタンヤー・ポンアーナンが提示した山田長政像は、史実から離れ、神話化されている。両者とも山田はアユタヤ時代のタイの政治に強い影響力をもっていたと想定している。さらに、山田が政治力を持ちすぎたので、プラサート・トーン王は山田をタイから放逐した、としている。タンヤーは、山田は政治力を、経済的利益追求のために使ったと述べている。1970年代当時の、日本の経済進出に対するタイ側の強い反発という状況の中で、山田長政像も反日の道具となり歪められたのである。1970年代を過ぎると、タイ側の山田長政に対する関心は、再び急速に冷却化した。

結 び

本稿は、日本およびタイにおける山田長政に関する記述の全体像を、それが現れた当初より今日に至るまで、極力系統的に調査収集することによって、明らかにしようと努めた。さらに、これらの資料から読みとることができる山田長政像の特徴を、日本に関しては5つの時期に区分して分析した。その際、どのような時代状況、史的背景のもとでそのような山田長政像が作られたのか、また、作られた山田長政像と、日本人のタイ観・対タイ態度、あるいはタイ人の日本観・対日態度との間には、どのような相互関係があるのかを、できるだけ明らかにした。

本稿が明らかにした点は次のように要約できる。

日本における山田長政像の2回の神話化は戦前日本がタイに強い政治的関心を持っていたことを示している。明治の半ばに第1回目の神話化が生じた。山田は史実以上に大きな権力を握った人物として描かれた。山田はシャム王の王女と結婚し、シャムの国政を握ったという言説が作られた。このような山田像の歪みは国家主義的思想の影響によるものと考えられる。また、この時期の山田長政を扱った一般書には、西洋諸国が東洋諸国を併合することを望む今日、日本はシャムを危機から救うべきであるとい

う、アジア主義的思想も現れている。さらに、日本が国を維持し、かつ条約を改正するためには国力伸張、国富増進が大切であり、そのために南方への領土拡張は大切である、といった南進論の展開も見られる。これらの書物の中で、山田長政はアジア主義や南進論を实践した模範として位置づけられている。

1940年代には、第2回目の神話化が起こった。山田長政のイメージは戦争遂行という政治目的のために歪められて、山田長政は大東亜共栄圏建設のために、シャムに渡った英雄であるとされた。

戦後には、南進論あるいはアジア主義の中で生まれた、神話化された長政像は見られなくなったが、戦後においては、タイは日本の主要な経済的進出先となった事実が、戦後日本の長政像にも反映している。

一方タイ側から見れば、1930年代の日本との交流によって、初めて山田長政の存在が知られるようになったに過ぎず、それ以前においては、当然山田長政像も存在しなかった。1970年代に日本のタイへの経済進出が進行し、同時に日タイ貿易不均衡によるタイ側の赤字問題が大きくなると、タイでは日本のタイ経済侵略への批判が生じた。当時、タイでは山田長政を侵略者日本の象徴として、日本攻撃の材料として用いた。この時に、山田長政は政治力を持ちすぎたので、プラサート・トーン王にタイから追い出された、という言説が現れたのである。日本人には、山田長政は英雄というプラス・イメージがある一方で、タイ人には日本のタイへの侵略の象徴というマイナス・イメージが存在する。このイメージの乖離が、今日、なお日タイ関係に影を落としている。それは、冒頭で述べたナコーンシータマラートに作られた山田長政の石碑が波紋を呼び起こした事件などからも窺うことができるのである。

第1表 明治期小学校教科書に見る山田長政像

歴史教科書の中の山田長政

1879年（明治12年）『小学日本史略』

寛永2年（1625年）に長崎の商人津田某がシャム国に行く。シャムはゴアと戦って負け、シャム国王は津田に救援を求め、津田は山田長政とともに日本人数百人を率いてゴアと戦って勝つ。シャム国王は喜んで津田に王女を妻として与え、津田は妻子と供に日本に帰り、長政はシャム国に留まって国相になる。

1882年（明治15年）『日本小史』

南蛮人の渡来と同時に、日本人も、東南アジア各地に航海して行き、貿易を行った。山田長政はシャムに渡って、シャム国王を助けて国乱を鎮圧し、シャムの属国である六昆国の王に封ぜられた。

1883年（明治16年）『国史紀事本末』

山田長政は商船に雇われてシャムに渡り、シャム国の官吏となる。この時シャムの属国がよく反乱を起こしたので、長政は大阪落ちの浪人などでシャムに渡っていた8千人程の日本人を集めて軍隊とし、反乱を鎮圧し、これらの国々を自分の領地とした。また、シャムの政治をほとんど1人で取りしきり、1621年（元和7年）には日本に使節を送って入貢した。

1888年（明治21年）『小学校用日本歴史』

山田長政はシャムに渡り、シャム国王を助けて内乱を平定し、王女を妻とし、シャムの国政を代行した。

1893年（明治26年）『小学校用日本歴史』

「第 25 章山田長政」として長政のためにわざわざ一章を設けて、その事跡を詳述している。その要約は次の通り。長政は、駿府の糸商の滝、太田の台湾行きの交易船に密かに隠れて乗り込み、台湾に渡り、そこからシャムに渡る。この時シャムは四隣の国から攻められており、中でも六昆は最強であった。長政は軍略に優れていたため、シャム王は長政を将軍として、六昆征伐を命じる。長政は六昆軍を破り、その都も攻め落として六昆王を捕虜にする。シャム王は喜んで、褒美に妻として王女を与え、かつ、六昆王に封じた。シャム王は年老いていたので、長政が都に出て政治を代行する。シャム王が亡くなり、その王子が王位を継ぐと、長政は六昆に帰る。新王は奸臣たちに殺害されたので、長政は義兵を起こした。奸臣たちは長政に毒を盛って殺害した。生前の長政は、立身出世しても日本のことを忘れず、シャムの産物を幕府に献じて、忠誠の意を表した。

1898 年（明治 31 年）『新撰 帝国史談』

山田長政は、兵事を好み、シャム国に渡ってシャム国王のために外寇を破って貴族に列せられた。

1900 年（明治 33 年）『小学国史』

山田長政はシャム国王を助けて、国乱を平定した。

国語教科書の中の山田長政像

1887 年（明治 20 年）『尋常小学読本』

「第 26 課 山田長正の話」として、長政の一生を簡潔にまとめている。普通は「長政」と書くのに、「長正」としているのは、元和 7 年に長政から酒井雅楽頭宛てに書かれた手紙の差出人の所に「長正」と書かれているからか。

長政は大望を抱いてシャムに渡る。ときにシャムは四方の隣国から攻撃を受けており、その中でも六昆国が最も強い。長政は軍略に優れていたため、シャム王は長政を将軍として、六昆を討たせる。長政は奇計を用いて六昆兵を破り、その国も占領してしまう。他の隣国はこれを見て、シャムに和を請う。シャム王は長政に褒美としてオークプラという位（日本の大名頭のようなもの）を与えた。また、シャム王が年老いた時に長政に政治を代行させた。

1893 年（明治 26 年）『帝国読本』

「第 8 章山田長政」として、その一生をコンパクトにまとめている。

長政がシャムに渡るところからシャムの将軍となって六昆を攻め滅ぼすところまでは、上記明治 20 年の『尋常小学読本』と同じ。異なるのは、シャム国王は長政の功を賞する時、その王女を妻として賜い、六昆国に封じたこと。後にシャム王の摂政となった点は、『尋常小学読本』と同じ。

1900 年（明治 33 年）『国語読本尋常小学校用』

「第 9 章山田長政」としてその一生をまとめている。上記明治 26 年の『帝国読本』とほぼ同じ内容。しかし、それに付け加えて、シャム王が亡くなってから、王位をその子に譲り、長政は六昆に帰る。奸臣たちが、新王を殺して王位を奪い、長政は怒って義兵を起こそうとするが、奸臣たちに毒殺されてしまう。長政は生前、日本を懐かしみ、シャム産物を幕府に献じて故国の恩に感謝した。

修身教科書の中の山田長政

1892年（明治25年）『尋常小学修身書』

第11章に「報国」とタイトルされた徳目の例があげられているが、その4つ目に長政が出てくる。長政がシャムに渡り、シャム王を助けて、六昆と戦い、これを討ち負かした。こうして後に六昆の王となった。これは、長政がシャム王の恩に報いたということであろう。

第2表 昭和初期の小学校教科書に見る山田長政像

修身教科書の中の山田長政

1941-45年まで使用された『文部省 初等科修身二』（小学校4年生向けか）

第11課が「山田長政」。長政はシャムに渡り、まず日本人町の長となり日本人義勇軍の隊長として手柄を立てて出世し、最上の武官になったこと、日本と貿易を促進したこと、後、ナコン王に任命されてから、一年ばかりの間に亡くなったこと。

尚、同教科書には学習者用のほかに、教師用もあり、後者には教材の趣旨、なぜ、どのような目的でこの教材を取り上げ、どのように教えるべきか等が明示されているので、なぜ長政が再び教科書に取り上げられたのか、どんな長政像を子供たちに教えようとしているのかが、明瞭に読み取れる。それによると、まずこの11課の目的は「初等科国語三の「浜田弥兵衛」と相呼応しながら、海外雄飛の精神を鼓舞し、大東亜共栄圏の建設に邁進するの心構えを養わせようとするもの」である。歴史的に見れば、肇国以来日本国民はしばしば海外に雄飛してきた。長政は室町時代から桃山、江戸初期にかけて南方発展した我が国民の代表的な一人である。日本人のために万丈の気を吐き、風雲に乗じた豪胆さは児童に学ばしむるところ。我が国民が、海外に進出するのは私利私欲をはかるといような角度からであってならず、例として、長政は遠く海外にありながら日本のためにつくした心構えの尊さを誉め、また、長政が海外にあってシャムの人々に親しまれ、かつ厚い信頼と尊敬を受けた点について大国民たるの資質を持つことを子供たちに理解させる、としている。ここには、大東亜共栄圏の盟主日本の国民としてふさわしい、他のアジアの人々から尊敬される人になるのだ、という考えが現れている。また、「海外で長政ほど高い地位に登り、日本人のために尽くした人はいない」（『文部省 初等科修身二（教師用）』50ページ）としている。

音楽教科書の中の山田長政

『初等科音楽二』

第8課に「山田長政」の歌が出てくる。長政像、教育上の趣旨は上記修身と同じである。歌詞は次の通り。

1. 黒潮寄せ来る大うな原も わたれば近し シャムの国
南へ、南へ、船行く、船行く、山田長政日本男子。
2. 正義のいくさに力をそえて、いさをは高し、ナコン王
南へ、南へ、国威はのび行く、山田長政日本男子。

社会教科書の中の山田長政

『初等科国史下』

第9章第2節「日本人町」の中に、山田長政について一行出てくるが、その長政像、教育上の趣旨は上記修身と同じである。

『初等科地理下』（小学校6年生用）

この地理教科書は、日本を中心に大東亜の地理を把握することを目的として作られ、従来の地理書に見られないものも相当載せられているとしているが、確かに

シャムの記述が比較的多く取り上げられ、その中に長政が少し出てくる。

- 1 H. Carroll Parish "The myth of Yamada Nagamasa and its effect on Thai-Japanese relations" *Journal of the Siam Society* XLVII pt. 2., November, 1959. 石井米雄, 吉川利治『日タイ交流600年史』（講談社, 1987年）
- 2 8つの雑誌とは、『タマサート大学ジャーナル』（ワラサーン・タマサート）、『芸術と文化』（シラパ・ワタナタム）、『古の都』（ムアン・ボラーン）、『歴史雑誌』（シーナカリン・ウィロート大学の雑誌）、『シャム協会紀要』（*Journal of Siam Society*）、『文学部紀要』（チュラーロンコーン大学とシラパコーン大学のもの、2種）、『芸術の源』（文部省芸術局発行のもの）。
- 3 智原五郎八『シャム国風土軍記』、『シャム国山田氏興亡記』（『海表叢書 巻5』更正閣書店, 京都, 1928年に収録）。
- 4 『天竺徳兵衛物語』（『校訂漂流奇談全集』博文館, 1911年に収録）
- 5 『山田仁左衛門渡唐録』（『校訂漂流奇談全集』博文館, 1911年に収録）
- 6 小和田哲夫『山田長政—知られざる実像』講談社, 1987年, 7ページ
- 7 前出『山田仁左衛門渡唐録』991ページ
- 8 同上書, 972ページ
- 9 『気吹おろし』（中田千畝『日泰関係と山田長政』日本外政協会, 1943年所収. 351-361ページ）
- 10 同上書, 361ページ
- 11 『通航一覽』巻之265~269（シャム国部一~五）に山田長政について書かれた資料が網羅されている。
- 12 本稿では、代表的な教科書のみを対象とし、講談社の『日本教科書大系 近代編』（海後宗臣編）を用いる。また、明治以降の教育史については同大系の中の『日本教科書大系 近代編第1巻 修身（一）』に収められている「近代教科書総説」及び山住正巳『教科書』（岩波新書, 1970年）を主として参考とした。
- 13 『日本教科書大系 近代編第20巻』538-9ページ
- 14 これらの西暦は教科書が印刷された年であり、教科書が教室で用いられた年ではない。
- 15 竹内好「アジア主義の展望」『現代日本思想史大系 9—アジア主義』
- 16 同上書, 21ページ
- 17 伊藤友信「アジア主義と脱アジアの思想」『日本思想 講座第8巻 近代日本の思想第3巻』（東京, 有斐閣, 1977年）57ページ
- 18 矢野暢『日本の南洋史観』（中央公論社, 1979年）19ページ
- 19 大鳥圭介『暹羅紀行』（東京, 1875年）中の「暹羅紀略（下）」122ページ
- 20 森貞次郎『山田長政シャム偉蹟』（春陽堂, 1887年）
- 21 青池晁太郎「シャム国王山田仁左衛門は駿府の人なり」、『明治会叢誌』第42号（5月）43-44ページ
- 22 関口隆正『山田長政伝』（関口隆正, 静岡, 1892年）
- 23 間宮武『山田長政偉勲録』（函右社, 1892年）
- 24 同上書, 6, 51ページ
- 25 紫山川崎三郎他編『日本百傑伝 第12編』（博文館, 1893年）149-161ページ
- 26 渡辺修二郎『世界における日本人』（慶應書房, 1893年）
- 27 同上書, 113ページ
- 28 後藤肅堂「山田長政について（上）」、『中央史壇』5-3（1922年3月）400ページ
- 29 桃川燕林講演（講演）『山田長政遠征記』（日吉堂, 1894年）
- 30 上木浩一郎『駿河名勝遺跡』（坂本書房, 1894年）22-23ページ
- 31 阿川太郎『シャム王国』（経済雑誌社, 1897年）
- 32 同上書, 2ページ

- 33 同上書, 132 ページ
- 34 少年世界は, 近代日本における児童文学の第 1 人者, 巖谷小波を編者として博文館から明治 28 年から昭和 8 年まで発行された。明治時代を代表する最も有名な少年雑誌。
- 35 この考えは明治 37 年の伊藤銀月 (148 ページ), 大正 6 年の池田林儀「山田長政の最後」『少年倶楽部』第 4 巻 12 号 (1917 年 10 月 10 日) (43 ページ) も同じである。
- 36 森島城「東西 24 傑 山田長政」『少年世界』第 4 巻 6 号 18-24 ページ
- 37 『少年読本第 7 編 山田長政』(博文館, 1899 年)
- 38 谷信次『海の大日本史』(大学館, 1903 年)
- 39 伊藤銀月『日本海賊史』(隆文館, 1904 年)
- 40 同上書, 179-180 ページ
- 41 大町桂月「山田長政」(高木斐川編『趣味史実 英雄の面影』教文社, 1919 年に収録)
- 42 同上書, 255 ページ
- 43 この後藤肅堂の論文は, 筆者の調査では, 「上」しかなく「下」は発見できなかった。
- 44 後藤肅堂「山田長政とシャムより奉納せし絵馬について (上)」『新小説』第 26-11 号 (1921 年 11 月) 43 ページ
- 45 どうして童話の桃太郎が日本の海外進出, 拡張主義と結び付けられて述べられるようになったのか, 興味深い。この点は本論からそれるので, 他の研究に譲りたい。
- 46 新村出「シャムの日本人町」, 『続南蛮広記』(岩波書店, 1925 年) 212-213 ページ
- 47 大仏次郎「日本人オイン」, 『少年倶楽部』昭和 5 年 1 月号 183 ページ, 2 月号 114-116 ページ, 3 月号 149 ページ, 昭和 6 年 12 月号 250-1 ページ
- 48 中村吉蔵「山田長政」, 『日本国民』昭和 7 年 9 月号 276, 283 ページ
- 49 後藤乾一『近代日本と東南アジア』(岩波書店, 東京, 1995 年) 23-27 ページ
- 50 文部省『初等科修身二』1941-45 年
- 51 竹越与三郎『倭寇記』(白揚社, 1938 年) 194-200 ページ
- 52 長田秀雄「山田長政」, 『大陸』(1939 年 6 月) 152-169 ページ
- 53 角田喜久雄「山田長政」(同光社, 東京, 1954 年) 78, 106 ページ
- 54 シャムの王族の女性が長政に先に恋をした例としてはこれ以前にも 1, 2 例ある。明治 20 年の森貞次郎 (『山田長政シャム偉蹟』154 ページ) や昭和 7 年の中村吉蔵 (「山田長政」『日本国民』昭和 7 年 9 月, 404-409 ページ) など。尚, 角田喜久雄以降も昭和 17 年の八尋不二 (「山田長政」『新映画』第 2 巻 7 号, 92 ページ) がある。
- 55 歌詞は次の通りである。(菊池 博作曲)
1. 生死もとより数ならず 遠き祖国の名にかけて シャムロの急にふるい立つ 剣に青し椰子の月
 2. 奇しき縁にむすばれて 恋の花咲くメナム河 アユチャの城の高楼に 嘆きは深しルタナ姫
 3. 身は南海に朽つるとも 永久にとどめよその恋を 六昆の空風速く 流れてかなし 星 1 つ
- (テイタク(株)の制作管理課の協力により, 上記歌詞を入手できた。ここに謝意を表する。)
- 56 田澤丈夫『白象』元元書房, 1941 年, 279-285 ページ
- 57 『新愛知』昭和 15 年 7 月 30 日
- 58 佐藤春夫「山田長政の横顔」, 『改造』第 24 巻 8 号 (1942 年 8 月号) 90-96 ページ
- 59 『週間少国民』の発行者である日本少国民文化協会は, 1941 年 12 月 23 日に児童文化統制機関として設立された。43 年 1 月 1 日付けの同協会の役員中には, 本稿でその作品を取り上げた三人の作家, 大仏次郎, 佐藤春夫, 白井喬二も含まれている。(瀧澤民夫「戦争応援歌の教材化から戦中のこども史女性史へ」埼玉県高等学校社会科学教育研究会発行『女性史研究会報告第 3 号』66 ページ参照)
- 60 『佐藤春夫全集 第 4 巻』講談社, 1967 年に収録, 131-172 ページ
- 61 中田千畝「山田長政」, 『興亜』(昭和 17 年 8 月号) 144-6 ページ
- 62 沢田 謙『山田長政と南進先駆者』(潮文庫, 1942 年) 43-4 ページ
- 63 白井喬二「山田長政」, 『東亜英傑伝 7』田中宋栄堂, 1942 年, 15, 50-57, 95-98, 103, 188-190 ページ
- 64 ただ 1 件の例外とは, 池田宣政著『山田長政』ポプラ社, 1952 年。これは 1941 年に出た同じ作者の作品の 1 部, すなわち南進日本の先駆者としての山田長政という部分その他を削ったものであり, 新しい作品ではない。
- 65 脚本は『時代映画』第 5 巻 4 号, 1959 年 4 月号に収録
- 66 『朝日新聞』1959 年 3 月 6 日
- 67 『読売新聞』1992 年 7 月 5 日
- 68 1997 年 9 月 5 日の Chulalongkhon University, Faculty of Liberal Arts 主催のセミナーで, Dr Chanwit Kasertsiri (Tammasart University) の発言による。
- 69 『時代映画』第 5 巻 4 号, 1959 年 4 月号, 122-128 ページ

- 70 山岡荘八『山田長政』(東方社, 1969年) 106, 109-113, 146, 162-163 ページ
- 71 岩城政治「山田長政は誰に殺されたか」, 『歴史と人物』1971年9月号
- 72 江崎惇『史実 山田長政』(新人物往来社, 1973年) 93 ページ
- 73 このドラマの主演は林隆三, 吉永小百合。あらすじは『週間テレビガイド』1978年12月1日号に収録。
- 74 林青梧『山田長政』(光風社, 1980年)
- 75 同上書, あとがき
- 76 同上書, 42, 239, 129, 165 ページ
- 77 遠藤周作は山田長政をテーマに2つの作品を書いている。1つは, 1973年の舞台用の脚本「メナム河の日本人」(雑誌『劇』44号所載)であり, もう1つは1981年の小説『山田長政』である。この2つの作品は, ストーリー等は多少異なるが, 主題や作者の主張は共通している。
- 78 『朝日新聞』1972年8月21日
- 79 雑誌『劇』44号(1973年)7ページ
- 80 遠藤周作『王道への道—山田長政』(平凡社, 1981年)322-326 ページ
- 81 陳舜臣「山田長政」『人物 日本史記』(文春文庫, 1987年)181-9 ページ
- 82 主演松平健でその後も豪華キャストであった。なお, あらすじは明治座発行のパンフレット中に収録。
- 83 白石一郎『風雲児』(読売新聞, 1993年)55, 83, 223 ページ
- 84 岩城雄二郎『シャム国武士盛衰記』(光和堂, 1996年)この作品は1997年12月には, タイの週刊誌「マティチョン」に連載されていた。
- 85 Lamoom Shiibunruang という女性の葬式本として印刷された。(『王朝年代記』第20部13節“アユタヤと日本の交友についての報告”の前書き参照。)このサトウの本は, つぎの1885年の雑誌記事をもとにしたのだろう。“Notes on the intercourse between Japan and Siam in the seventeenth century” Transaction Asiatic Society of Japan volume 13 (1885) この雑誌記事の日本語訳は次の通り。アーネスト・メーソン・サトウ『山田長政事跡合考』(宮内省, 1896年)
- 86 クン・ウィット・マートラーが訳した部分訳は1934年に Kunjin Tip Sunpanpisut の葬式本として出版された。なお, これらの経緯については『王朝年代記』第79部49章の前書き(100-101 ページ)参照。
- 87 この人物について詳しくは, 拙著修士論文(第4章)を参照。
- 88 日本のどのプリンスかは, 明言されていない。1935年3月23日に2艘の日本海軍の練習艦隊(八雲, 浅間)に乗って来シャムした伏見宮博英王殿下が, 山田長政神社建立地地鎮祭に加わっている(日タイ協会会報14号, 昭和14年3月, 98 ページ)ので, 同殿下を指すものと思われる。
- 89 この時, 朗読されたのは1938年4月にシャム協会紀要に載せられたジレスの論文「ファン・フリートの『シャム革命史話』の分析」の第6章であった。ジレスのタイ名はプラヤー・イントラモントリーである。
- 90 ジレスの論文の第7章が読まれた。(JSS volume 30 part 2 p. 262 協会の活動参照。)
- 91 Francis H. Giles, “A critical analysis of Van Vliet’s Historical account of Siam in the 17th century” JSS volume 30 part 2 (1938 April) 残りの第7章, 第8章はシャム協会紀要の次号, 第30巻3部(1938年8月号)に掲載された。
- 92 『シャム革命史話』がタイ語に翻訳され, 『王朝年代記』に収録されたのは, これから26年後の1964年であった。
- 93 Francis H. Giles 前掲論文, p. 165
- 94 *Ibid.*, p. 163
- 95 *Ibid.*, p. 162
- 96 Somkiat Wanthana, “The Politics of Modern Thai Historiography”, Doctor of Philosophy thesis in Department of History, Monash University 1986, p. 502-3
- 97 Kachon Sukkhaapanit, “Soop sakaraat ratchakaan somdet phra Eekaatosarot” *Sinlapakoon*, Vol. 11 No. 3 (September, 1967) p. 101.
- 98 Rong Sayaamanon, “Prawatisaat samai krung Shiiayutayaa” *Eekasaan boraanakadii*, Vol. 5 No. 3 (September 1971), p. 39
- 99 *Pramuang Khampraasai saan le khamkhan khong chomphon Thanoom Kittikachon Naayokratthamontrii from 11th Dec. 1967 until 10th Dec. 1968, p. 25 and from 11th March 1971 until 6th Nov. 1971, p. 198*
- 100 *Nansuuprakooop kaanrian wichaaprawatisaat thai le taangpratheet samrap chan matthayom suksaa piithii 2 khong kromwichaakaan kraswangsuksaathikaan* (Ongkaankhaa kurusaphaa, 1972)
- 101 San Pathanootai, *Phrachao praasaatthong* (Bangkok, Kurusaphaa 1973), p. 162
- 102 Tanyaa Ponanan, “Gaantootaanyipun jaak Yamada thung Tanaka”, *Sangkhomsaat parithat*, Vol. 13 No. 3-4 (August-December 1976) p. 13, 18, 9

- ¹⁰³ Sombat Chantharawong, “Khamsoon thaang kaanmuang khong Wanwarit (Jeremias Foonfuriit) ruu Withesobaai khong Phrachao praasaatthong” *Warasaan Thamasaat*, Vol. 6 No. 1 (June-September 1976) p. 94, p. 11
- ¹⁰⁴ Nithi lousiiwong, *Kaanmuang thai samai Phra naarai* (Bangkok, Samnakhpim Matichon 1980) p. 17, 21-22.